

# 「適當」の運用上に現れる意味特徴

全 賢 善

## 0. はじめに

日本語の特徴の一つとして「曖昧さを帯びる表現形式の豊かさ」がしばしば指摘されてきたことは周知のことである。日本語の言語形式に表れる曖昧さは、一つの表現として、または表現の中の一つの語として表される場合もあるし、時としては表現末に付く助詞一つによっても表される場合もある。曖昧さを帯びる表現形式は世界のどの言語にもあり得る現象ではあるが、日本語に一層その特徴が現れるということは、日本語を習得しようとする学習者にとっては興味深いテーマであるとともに、学習上において誤用を引き起こす要因の一つにもなっている。

本稿は、日本語の曖昧さを帯びる表現の中から「適當」という語を取り上げ、「適當」に表れる話し手の主観的判断、心的態度の側面を明らかにする一方、「適當」の運用上に現れる意味特徴をも明らかにすることをその目的とする。

そもそもある語の意味究明には、その語の辞書の意味は勿論のこと、その語の用いられる文脈の特徴や文化的背景などの観察、分析、記述が欠かせないことは言うまでもない。<sup>(1)</sup>「適當」のように文脈や発話時における話し手の主観的判断、心的態度によって曖昧さが深まる語であればあるほどより一層そうである。従来、「適當」に関する意味記述は概ね次のように提示されてきた。

- ① 二つ以上の物事どうしが、それぞれの目的・状態・性質の点でふさわしいこと。ちょうどよいこと。あてはまること。
- ② いいかげん。 (『広辞林』第六版)

しかし、実際の言語活動で用いられる「適當」は上記の意味記述だけでは解明できない場合が少なくない。表現例(1)では、「適當さ」をめぐる話し手と聞き手

との情報のくい違いが見られる。<sup>(2)</sup>

(1) 上司：なんだ？これは。全然できてないじゃないか。

部下：適当にとおっしゃったので…。

上司：適当にも程があるだろう。

以下、本稿では「適当」に表れる「話し手の主観的な判断、心的態度」の側面を明らかにするため、「適当」に類をなす「適切」と比較してみる。そして、そのような「適当」の意味特徴によって、「適当」が対人関係によって使い分けられているということを、具体的な表現例に基づいて考察していく。

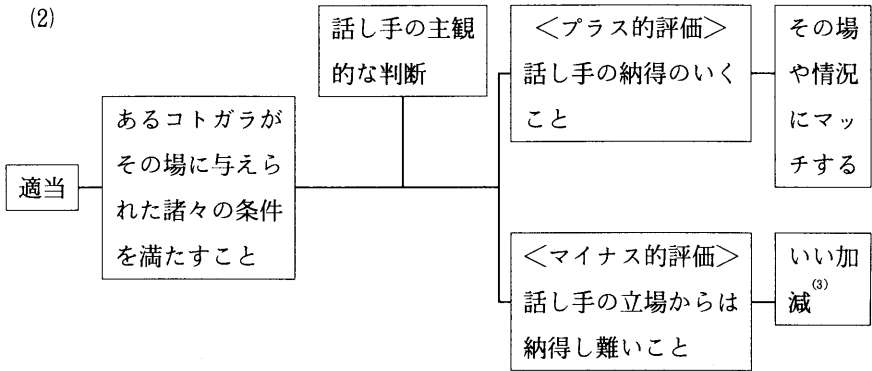
## 1. 「適当」の意味規定

「適当」に関する従来の意味記述が、実際の言語活動で用いられる「適当」の実例の全てをカバーしきれないものであることは既に述べた。従来、「適当」は「多義語」として扱われてきたが、その意味相互の関連性がどこに起因しているのかまでは言及されていない。森田(1996)は、「適当」の意味分析に当たって、語義の状況理解だけではなく現実の話者の意図するレベル内容、質の問題が重要であることは指摘しているが、話者の意図するレベル内容や質の問題が「適当」の対象となるコトガラとどのように関係しているのかについては言及していない。

本稿では、「適当」に関する既存の意味記述を踏まえ、実例から窺える「適当」の意味特徴をまとめ、「適当」の新たな意味記述を次のように提示する。

あるコトガラがその場に与えられた諸々の条件を満たすことに対する話し手の主観的な判断

「話し手の主観的な判断」とは、話し手の心的な態度までを含むもので、それは常にその場その場の文脈的な特徴、文化的な背景によって時としてはプラス的な評価として、またはマイナス的な評価として具現化されるものである。このことを簡単に図式化して見てみよう。



次節では、「适当」の語に「話し手の主観的な判断」がどのくらい深くかかわっているのか、「适当」と類をなす「適切」と比較しながら、その点についてより明確に分析していく。

## 2. 「适当」の運用上に表れる意味特徴

### 2-1. 「适当」に表れる話し手の主観的判断の度合い

次の表現例から窺えるように、「适当」と「適切」とはほぼ同じ意味で用いられる。

- (3) 嫌な気持と云うか怖いと云うか、適切な言葉が見つからないが、要するに逃げだしてしまいたくなって来る。  
(井伏鱒二「黒い雨」)
- (4) 私は焦燥感を覚えながら、どうしても適切な言葉を見つけられなかった。  
(沢木耕太郎「一瞬の夏」)
- (5) その件については今持ち出すのが最も适当だと思います。
- (6) それは鈴木さんに担当してもらうのが最も適切だと思います。

(3)から(6)までの「适当」を「適切」に、「適切」を「适当」に入れ替えても文全体の意味の変化は見られない。「适当」も「適切」も「あるコトガラがその場に与えられた諸々の条件を満たすこと」で一致している。しかし、異なるところは、「話し手の主観的判断、心的態度」とのかかわりの度合いである。「適切」

は「あるコトガラがその場に与えられた諸々の条件を十分に満たすこと」であり、そこには「十分さ」をめぐる話し手と聞き手との間に、くい違いの生じ得ないほど、客観的な基準値が前提とされているように見られる。反面、「適当」には社会的な通念としてのコトガラに対する評価が前提となっただけでも、そこには「話し手の主観的判断」が深くかかわっているため、時としてはプラスにもマイナスにも評価されることとなる。次に提示する(7)から(10)は「適切」を「適当」に入れ替えることのできない表現例である。

- (7) ……そう、たしかに生きている人間とはみとめられるのだから、男女老幼の別をもって呼ぶとすれば、ただ男のこどもというほかないが、それを呼ぶに適切十分なる名をだれも知らないような生きものであった。

(石川淳「焼跡のイエス・処女懐胎」)

- (8) そこへ入道から、これこれの所を思い出して修繕しました、とやってきたので、(なるほど。そういうことだったのか)と源氏は合点し、入道の処置にも、明石の君の心づかいにも感心した。いかにも、適切で聡明な、彼女の身の処しかただと思った。

(田辺聖子「新源氏物語」)

- (9) 何かにつけ、この女のいうことの、適切で思慮ぶかく、しかもつつまじやかなのを、源氏は非のうちどころなく思わないではいられない。

(田辺聖子「新源氏物語」)

- (10) 田舎の寺の住職の死というものは、異様なものである。適切すぎて、異様なのである。

(三島由紀夫「金閣寺」)

「適切十分なる」「適切で聡明な」「適切で思慮ぶかく」「適切すぎて」の「適切」には、対象となるコトガラに対して十分に条件を満たすものが前提とされていない。つまり、「適切」の意味役割を「適当」がその代わりに果たせない理由は、(7)から(10)までは、「適切」で表現されたコトガラに話し手の主観的判断、もしくは心的態度が入り込む余地がないからである。言い替えば、話し手の領域を越えるコトガラであることが窺える。逆に言えば、これは話し手の主観的判断、心的態度が許される場合には、その場その場によってコトガラに対する評価がプラス的にもマイナス的にも下されることから窺える。

- (11) 宣 誓 書 今般当造船所ニ於テ建造ノ第二号艦ニ関スル業務ニ干与セシメラル、ニ当リ之ガ重要ナルコトヲ認識シ、其ノ機密保持ニ附テハ最も注意シ同艦ノコトニ関シテハ事情ノ如何ニ拘ラズ肉親交友ニ対シテモ一切漏泄スルガ如キコトナキヲ宣誓仕り候依テ若シ万一些少ニテモ右宣誓ニ反スルガ如キコトアリタル場合ハ貴社又ハ海軍ニ於テ適當ト認めラル、処置ヲ執ラル、コトニモ異存無之候  
(吉村昭「戦艦武蔵」)
- (12) 「貴社又ハ海軍ニ於テ適當ト認めラル、処置……」とは、どういうことを意味するのだろうか。  
(吉村昭「戦艦武蔵」)

(11)(12)に見るように、「適当」には「話し手の主観的判断、心的態度」が深くかわっているからこそ、話し手と聞き手との「適当さ」をめぐるくい違いも起こるのである。つまり、(11)での「適当」には、「あるコトガラがその場に与えられた諸々の条件を満たした上、それが好ましい方向へと向かうべきであると話し手が想定して発しても、コトガラに関する「適当さ」への評価が当該の聞き手の主観的判断、心的態度によっては話し手の想定した「適当さ」とくい違う可能性も十分にあり得るということが暗示されている。そして、(12)でも窺えるように、話し手は、相手の想定した「適当さ」と話し手自身の想定した「適当さ」とのくい違いに対する疑念が表されている。しかし、このような「適当さ」をめぐるくい違いは、「連帯感」や「同一感」によってカバーされる場合がある。

- (13) 適当な若い娘がいれば紹介するからもう心配しなくていいよ。  
(14) 適当にみつくろってちょうだい。

「連帯感」「同一感」<sup>(4)</sup>とは話し手が当該の話の相手も話し手側に属していると想定するものである。言い替えば、話し手は当該の話の相手である聞き手も同じ「内」であると判断する。「適当」を発した話し手も、「適当」を理解する立場でいる当該の聞き手も、互いに同じ「適当さ」を想定しているからこそ(13)(14)が日常の言語活動において自然に通用しているのである。

以上、「適当」の意味特徴を見てきたが、何よりも注目に値するのは、「適当」の運用における軸となるものが、話し手と聞き手との間の「連帯感」ないしは

「同一感」であり、それをベースとして話し手は「適当」を用いるのである。そして、話し手の想定した「適当さ」を聞き手に言い伝え、聞き手は話し手との間で暗黙裏に定められた、言い替えれば社会的な通念の下で定められた基準に沿って「適当さ」を読みとるのである。

このように、話し手と聞き手との「連帯感」ないしは「同一感」が「適当」の運用上に深くかかわるため、「連帯感」や「同一感」が外れた場合には「適当さ」をめぐる話し手と聞き手との情報のくい違いが生ずるのである。この場合には、コトガラに対するマイナス的評価の現れることは言うまでもない。

(15) A : 先生も適当に叱ってくれればよかったのよ。

B : 「適当に」って。その「適当」でいじめがもっと激しくなったんだよ。

(15)のBが用いた「適当」には、B自身の想定した「適当さ」と当該の話の相手であるAの想定した「適当さ」のくい違いが、マイナス的な評価として現れた表現例である。

## 2-2. 「適当」の運用上に現れる対人関係の影響

本節では、これまでに意味解釈してきた「適当」の語が、話し手と聞き手との対人関係によって使い分けられていることを、表現例に基づいて明らかにする。

(16)? 適当に召し上がってください。

(16)が特別な場面設定なしでは現実の言語活動では容認されない表現であることは日本語母語話者なら誰も知っている。(16)の表現例が容認されにくい理由は、話し手の主観的な判断が当該の話の相手、即ち聞き手の判断より優先されてはいけない場面で用いられた表現例であるからである。つまり、「召し上がる」という「尊敬語」は目下の人から目上の人に向かって敬う気持ちを表明するのに用いられる動詞であると決められている言語社会においては、「適当さ」を決めるのも社会的に「上」に位置している人に任されるのが通例であるからである。<sup>(5)</sup>  
 (16)を次の(17)の表現例と比較して見よう。

(17) そんなことを言ったって、そりゃお前、適当に食わにゃいかんよ。

(阿川弘之「山本五十六」)

(17)が(16)に比べて自然な表現であるのは、(17)を表出した話し手が(17)の話の相手となる聞き手より待遇関係から「上」か「同」に位置しているからである。このように、対人関係によっても使い分けられる「適当」は、対人関係が「力」の強弱に基づいた場合にはより明白に現れる。

(18) 先方の見積もりは予算的に適当かい。

(19) 見積もりは適当に出しておきました。

(18)は上司から部下への、そして(19)は部下から上司へ表出された表現であるとすれば、暗黙裏に「適当さ」を分かり合っている日本社会においては、(19)は何となくマイナス的なニュアンスは免れ得ない。何故なら、部下が上司に属しているコトガラに対して「適当さ」を決定づけることは常識に外れることであるからである。

「適当」が対人関係によって使い分けられているということを根拠づけるもう一つの手掛かりに「連帯感」がある。これについては神尾(1990)やBrown, P. & Levinson, S. (1987)のポライトネス論で言及されているが、「連帯感」に立脚した「適当」の対人関係による使い分けは概ね次のように整理できる。

つまり「適当」の運用上においては、「連帯感」や「同一感」が前提とされているからこそ、話し手が聞き手より社会的な対人関係において「下」に位置している場合には、「適当」を用いることは円滑なコミュニケーションを阻害する恐れさえある。何故ならば、「連帯感」が前提とされていても「適当さ」を決めるのは、日本語の社会では対人関係において「上」に位置している人に任せられることが暗黙裏に決まっているからである。「適当さ」が話し手の「あるコトガラがその場与えられた諸々の条件を満たすことに対する主観的な判断」によって決められるものであるとしても、そこに「社会的な対人関係」という文脈の特徴や文化的背景がある場合には、「適当さ」の決定権が対人関係において「上」に位置する人、特に「力」が話相手より相対的に強い立場に置かれている人に回され

るということである。逆に言えば、話し手が聞き手より「下」に位置している対人関係の下で「適当さ」の決定権を行使したならば、それは場合によっては聞き手に「適当さ」を押しつけるような印象を与えることとなる。

(20) 留学生：(提出用の) 書式はどうすればいいでしょうか。

担当者：別に決まってはいませんが、必要事項が適当に分かりやすく書いてあればいいです。

(21) 留学生：(提出用の) 書式はどうすればいいでしょうか。

担当者：別に決まってはいませんが。

留学生：それじゃ、書式は適当でいいでしょうか。

担当者：適当ではなく、分かりやすく書いてください。

(20)で担当者の用いた「適当」は、「あるコトガラがその場に与えられた諸々の条件を満たすこと」を指し、さらにそれはプラスの評価であるべき「適当さ」である。一方、(21)で留学生が用いた「適当」は、日本語の実際の言語活動では「生意気だ」というニュアンスになりかねない。ここで重要なことは「適当さ」を決定する側が、対人関係上、話し手であるか聞き手であるかを適切に判断できる判断力が、当該の話し手に備わっていなければならないということである。言い替えば、話し手は「適当」の語が対人関係によって使い分けがなされる語であることを認識しておかなければならないということである。

以上の分析から、「適当」という語は、社会的な対人関係によって明確に使い分けられていることが明らかになった。

### 3. おわりに

本稿では、「適当」の語の意味に話し手の主観的判断、心的態度が深くかかわっていることを、「適切」との比較を通して明らかにした。さらに、「適当」の有する意味特徴によって、それが実際の言語活動では対人関係によって使い分けられていることも明らかにした。しかし、これは実際の言語活動における「適当」の使い分けが対人関係だけによって左右されていると言っているのではない。様々



な非言語的要因の影響によって話し手の主観的判断、心的態度は変化するものであり、それらの諸要素が統合されて「適当さ」に対する運用上の意味が確定されるからである。

あるコトガラに対する話し手の主観的判断や心的態度が言語表現形式の意味や用法を左右するということは、語の意味分析に当って重要な要素の一つであると言えることができる。

### 注

- (1) 国広・鈴木訳(1988) D.D. スタインバーグ著参照。
- (2) 本稿では、「情報」を広い意味として、話し手の領域に含まれている知識、考え方、ひいては話し手の心的態度をも含む用語として用いる。
- (3) マイナスの評価が下された場合、「適当」は「いい加減」と入れ替えられる。しかし、「いい加減」という語も多義語であり、前後の文脈や話し手の主観的判断、心的態度によって意味づけられる特徴を有する。本稿での「いい加減」は「その場限りで無責任なさま(『広辞林』第六版)」を意味した場合に限る。
- (4) 神尾(1990)参照。
- (5) 社会的な対人関係については杉戸(1985)、文化庁(1975)参照。

### ◇◇◇引用文献◇◇◇

- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』大修館書店
- 池上嘉彦訳 (1969) 『言語と意味』Stephen Ullmann 著 大修館書店
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- (1986) 「語義研究の問題点—多義語を中心として—」  
『日本語学』第5巻第9号 明治書院
- 国広哲弥・鈴木敏昭訳 (1988) 『心理言語学』D.D. スタインバーグ著 研究社
- 三省堂編修所編 (1991) 『広辞林』第六版 三省堂

- 新潮社版 (1995) 『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』新潮社
- 杉戸清樹 (1985) 「待遇表現」『日本語教師用参考書Ⅰ 言語行動と日本語教育』  
凡人社
- 文化庁 (1975) 『待遇表現』日本語教育指導参考書2
- 棚山洋介 (1993) 「多義語分析の方法－多義的別義の構造－」『名古屋大学日本語・  
日本文化論集』第1号 名古屋大学留学生センター
- 森田良行 (1995) 『日本語の視点－ことばを創る日本人の発想－』創拓社  
—— (1996) 『意味分析の方法－理論と実践－』ひつじ書房
- 山田 進 (1990) 「語の意味特徴の性格」『文法と意味の間－国広哲弥教授還暦退官  
記念論文集－』くろしお出版

(チョン ヒョンソン 日本言語文化)